

# 國學院大學學術情報リポジトリ「K-RAIN」

延喜式内石楯尾神社神主軍多利日向介多基成について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-12-12 キーワード: 新編相模國風土記稿, 石楯尾神社, 軍多利日向介多基成, 白川家門人帳, 川勾神社日記 作成者: 遠藤, 孝徳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001855">https://doi.org/10.57529/0002001855</a>

# 延喜式内石楯尾神社神主軍多利日向介多基成について

遠藤孝徳

## はじめに

「相模國元高座郡津久井領佐野川岩村三國山前祠元地延喜式内石楯尾神社神主軍多利日向介多基成」、これは本稿で取り上げる軍多利日向介多基成（佐野川村百姓源兵衛悻熊次郎、以下、軍多利日向介）が『新編相模國風土記稿』（以下、『風土記稿』）に採録された石楯尾神社の由緒・縁起と自家の系譜の中で署名した名乗りである。軍多利日向介はこの名乗りの中に自身が神主を務める神社が相模国の延喜式内社十三座のひとつ、石楯尾

神社であること、そして軍多利日向介の家系は石楯尾神社の鎮座と祭祀に不可分の由緒をもった家系であることを語る意図を深く込めている。軍多利日向介は自身の手による長文の石楯尾神社の由緒・縁起と自家の系譜を『風土記稿』に採録させることに成功して、自身は『風土記稿』の成る直前の天保十二年の十一月に幕府寺社奉行の白洲にかけられ、神主の地位を剥奪されて姿を消した。

しかし、『風土記稿』には彼が提出した石楯尾神社の由緒・縁起と彼の家の系譜、そして石楯尾神社の所在する佐野川の各所にまつわる「伝承」が採録されたまま現在に伝わった。そし

てこの特異な神主の存在が忘れられてもなお、佐野川の郷土史をひもとこうとするひとびとの必ず参照する史料となつてゐる。『ふじの町史研究誌』に佐藤誠夫が寄稿した「神社縁起に見る佐野川」<sup>(2)</sup>は、佐野川淨禪寺住職石船のまとめたもの、としながら軍多利日向介のまとめた石楯尾神社と日向介の系譜の異本を紹介し、城山町史の研究誌である『城山風土記』に小川良一が寄稿した「佐野川・名倉石楯尾神社論争考」<sup>(3)</sup>は「風土記稿」掲載の軍多利日向介の由緒・系譜をふまえながら、論社の多い石楯尾神社の考証を試みている。

前述の通り、石楯尾神社は論社が複数あつてこれまでもいづれが延喜式内社石楯尾神社であつたか、という問題が掲げられ検討が重ねられてきたものだが、本稿では延喜式内社の特定を目的とはしない。本稿は小川の論文の末尾にある「軍荼利日向守多基成等については、更にその人物像を追う必要があり、廟所も末裔も在地に見当らず、今後の研究に待つことになる」という指摘に応えるように、軍多利日向介その人について明らかにできたことを紹介したい。

## 1 軍多利日向介と石楯尾神社

軍多利日向介その人を追う前に、まずは舞台となつた佐野川の土地を紹介し、『風土記稿』をはじめ、郷土史にたびたび引用・参照されてきた軍多利日向介の残した石楯尾神社由緒や軍多利日向介の系譜のあらましをまとめる。

### (一) 佐野川

軍多利日向介の故郷佐野川（以下、佐野川村）は、現在の神奈川県相模原市緑区に属し、神奈川県北西部にあつて境を山梨県上野原市、東京都西多摩郡檜原村・八王子市に接するいわゆる山村である。近世の佐野川村は元禄四（一六九一）年に近郷あわせて二七カ村を「津久井県」と称するようになった地域のなかにあり、元禄年間の村高三三八石余、人口九二七人、馬数八四頭、寺五軒、明治三年の村高三四五石余、人口一〇六五人、馬数九四頭である。古くは漆、柏皮、楮など山村らしい産物を貢納、出荷していた。一方、養蚕については開国を通じて重要度を強め、佐野川村の名主佐藤才兵衛は安政年間に横浜に出店して絹製品を輸出のルートに載せている<sup>(6)</sup>。

佐野川村は北方にそびえる三国山（三国峠）・生藤山（シヨウトウサン、キフジヤマ、ハイフジヤマ）から南に延びる尾根で東西に地区を分ける。西側は旧甲相国境であり、現在は山梨・神奈川両県の県境になっている境川が南流し、東側は沢井川が南流する。寛永年間には境川に接する西の地域が「岩（イワ）分」、沢井川の上流域にあたる東側が「和田（ワダ）分」として称されていた。岩分には上流から上岩、御霊、下岩の三集落があり、和田分には和田、登里（トリ、遠里）、鎌沢、橋詰、上河原（カミガワラ、上川原）の四集落がある。この七集落はそのまま『風土記稿』の小名に一致する。二つの谷筋で構成された佐野川村を結ぶのは三国山・生藤山から南に延びた尾根の倉子峠（クラコトウゲ）であり、ここには地域の俳諧集団に影響のあった松尾芭蕉とその高弟各務支考の句碑が建てられている<sup>8</sup>。この山道はまた武州八王子恩方から佐野川村和田を経て甲州上野原に至る甲州道中の裏道として往来がにぎわった道でもあった。石楯尾神社はこの峠を西に下りた岩分の上岩にあり、軍多利日向介その人もこの上岩の人であった。

(二) 軍多利日向介の残した石楯尾神社由緒・縁起や軍多利日向介の系譜のあらまし

佐野川の石楯尾神社は、神武天皇の皇子神八井耳命を始祖とする多臣を遠祖にもつ軍多利日向介の家系が代々祭祀してきたものである。多臣は日本武尊の東征に従って佐野川の地に東国鎮護のために神武天皇以来の「天磐楯」を斎き祭るよう命じられ、定住と祭祀を始めた。石楯尾神社の名も佐野川の地名もこうした神武天皇や日本武尊にちなむものである。ほかに雄略天皇の時に養蚕の技術を改良して献策した多強彦がいる。なにより多臣の出である石村石楯は恵美押勝を斬った軍功があり、その妻藤木姫とともに石楯尾神社に合せ祭るものである。大同年間平城天皇より、応和年間村上天皇より勅祭を受けて社殿を充実させ、源頼朝、新田義貞からも寄進があった。

しかし、天文七年に神主であった軍多利麻子太夫多季續が関東管領上杉氏に与力して討死したため後北条氏の攻撃を受け、その子岩村日向守多吉續らも甲州武田氏に従って移住したため神社は荒廃してしまつた。武田氏が滅び、圧迫してきた後北条氏も滅ぶ頃からようやく子孫が佐野川で

再興に取り組み現在に至った。軍多利日向介は以上の長い歴史と戦国時代の苦難の果てに石楯尾神社を再興した家系の子孫として神主を務めているものである。

以上があらましで、このほか『風土記稿』には後北条氏滅亡後関東に入室した徳川家康が三國山にのぼり、石楯尾神社に参拝したため残ったという「童謡」を紹介している。また、佐野川地域の旧家に残された異本にはこのほかにも源頼信が平忠常を討った際の剣を奉納した<sup>9)</sup>、など、『風土記稿』に採録された由緒・縁起にはみられない記事がある。異本が複数形成された背景には由緒・縁起をまとめるにあたって軍多利日向介がたびたび推敲を行なったことがあるのではないかと考えるものである。このことについては別の機会に検討したい。

## 2 軍多利日向介その人を追って

以上、『風土記稿』をはじめとして興味深い由緒・縁起、系譜を書き残した軍多利日向介であるが、彼自身は佐野川の地に家を伝えず、小川の指摘するようにその後の行方がかめない人になっていた。しかし、これだけ目立った叙述をする能力を持った人がほかに何も痕跡を残さなはずもなく、神奈川県

県西城で地方史研究を続ける中で出会った史料に日向介の活動の跡を記すものを見いだしたので以下に紹介し、そこからわかった軍多利日向介の姿を述べたい。(表1) 参照)

### (一) 軍多利日向介の史料

軍多利日向介の活動の跡を追うことにつながった史料は大別して以下の三種になる。

- ① 石楯尾神社と石楯尾神社神主軍多利日向介の由緒・縁起、系譜『新編相模国風土記稿』、『改訂新編相州古文書』<sup>10)</sup>(以下、『相州古文書』)、および前掲、佐藤誠夫が浄禅寺住職石船がまとめたものとして紹介した『ふじの町史研究誌』第1号所載のもの(『風土記稿』・『相州古文書』所載のもの異本)
- ② 白川伯家門人としての軍多利日向介
  - ・『白川家門人帳』<sup>11)</sup>
  - ・地方史資料編に収録された軍多利日向介が白川伯家門人として発行した許状類

『寒川町史』・『茅ヶ崎市史』・『平塚市史』・『二宮町史』・『厚木市史』(表2) 参照)

・五所八幡宮所蔵文書 神奈川県中井町遠藤、五所八幡宮所蔵<sup>12)</sup>

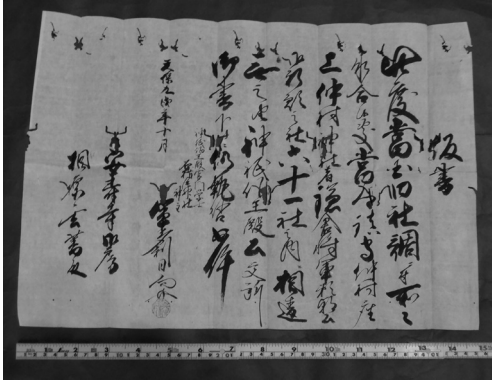
表1 軍多利日向介関係史料年表  
凡例 『吉村』：神奈川県立公文書館『吉村毅家文書』

1819	文政2	乙卯		この年、日向介、百姓源兵衛の帳外となる 『吉村』No140
1827	文政10	丁亥		この年、日向介（百姓勇助弟）、白川殿配下神職として生計を立てる旨、代官所へ届出される。 『吉村』No130
		8月5日	日向介、白川伯王家に入門。 「江川太郎左衛門御代官所津久井縣佐野川村 岩権頭」 『白川家門人帳』p.176	
1828	文政11	戊子	4月8日	岩権頭、親類勝右衛門、名主才兵衛連印で武蔵国多摩郡檜原村川乗四組に宛てて狭野皇宮の境内地として百坪ほどの寄附を求める。 ※文書は文政11年を「己（支欠ケ）」としている（己丑は文政12年）。 『檜原・ふるさとの覚書』pp.78-79
1835	天保6	乙未		「石楯尾神社神主軍多利日向介基成」の初出 「本官所白川神祇伯王殿御流儀・・・」 *断簡、仮題『古勅願所三國山前祠元地延喜式内石楯尾神社由緒』 佐野川邊見和志家文書
		4月	日向介、白川伯王家に風折浄衣から立烏帽子布齋服を願出、村方と相談の上、無神主の佐野川村鎮守石楯尾神社神主を引き受けたこと、岩権頭から軍多利日向に改名したことを江戸役所経由で届け出る。 『白川家門人帳』p.176	
1836	天保7	丙申		『新編相摸国風土記』の編纂官、日向介の先祖の石碑と由緒の確認の必要性を指摘する。 『藤野町史』通史編
1838	天保9	戊戌	3月	軍多利日向介の兄勇助（重蔵）の穀物取引の代金をめぐる争論の相手（寺方村平太）から日向介に宛てて、逮捕された勇助が吟味中に病死したことについて詫状が出される。
		10月	日向介、相模国中村五所八幡宮の由緒について別当安壽寺相原玄蕃に宛て「仮書」と題して証明文を残す。 足柄上郡中井町遠藤 五所八幡神社蔵文書	
		11月	日向介、川勾神社神主の二見神太郎を御触頭として推挙する。その時、署名に「石楯尾神社神主 軍多利日向介 ㊦」とある。 『二宮町史』別編 寺社・金石文 No131 p.241	
1840	天保11	庚子	10月19日	日向介（白川伯家）がとりもった願書につき、先に吉田家へ提出した願書と重複を理由に引き戻す希望が虫久保忠次郎より二見神太郎宛てに提出される。 『川勾神社日記（二）』p.181

1841	天保12 辛丑 8月	旗本小林十郎左衛門が知行所真田村牛頭天王社の神主陶山豊後に関わる争論について、経緯に1839天保9年乙亥白川神祇道触頭軍多利日向介が関与していることに触れる。 『平塚市史』4資料編近世3No.146
	11月25、26日	日向介、「神太夫」で『川勾神社日記』に登場。虫久保村天神社人二宮弥五兵衛とともに寺社奉行戸田日向守の白洲で「上下剥取られ、元々之の百姓ニ被致、御白洲にて済口被申渡・・・」
	11月27日	日向介、虫久保村二宮弥五兵衛とともに寺社奉行の処分の内容を認め、「石橋尾神社軍多利神太夫」名で江川太郎左衛門代官所に始末書を提出する。連署した者の中に、『川勾神社日記』にも登場する皆木喜三郎(二見神太郎の代理)の名も見える。 『吉村』No.140
1847	弘化4 4月18日	日向介、曾我谷津村に居住した記事の初出。「(二見神太郎)曾我谷津小沢明神主熊勝廻江行普請中ニ付、隠宅軍多利事岩村源馬・・・」 『川勾神社日記(二)』p.225
	11月10日	日向介、孝明天皇踐祚にともなう伯王家の息女の儀礼参加につき、白川家役所からの通達の宛て所に触頭二見神太郎とともに「取締岩村弦馬」の名で記される。 『川勾神社日記(二)』pp.237-238
1853	嘉永6 8月28日	日向介、曾我谷津村を拠点に「岩村源馬」名で活動をしていたが、免許などをめぐって金銭の取り立て方が「風聞悪敷候」と二見神太郎が記す。 『川勾神社日記(二)』p.269
1864	元治1 10月23日	日向介、「岩村玄馬」 <sup>(マア)</sup> 「岩村玄場」名で白川伯王家門人に仲介した件に付、村上出雲守宛てに出した書面と仲介した門人58件が『白川家門人帳』甲巻相模の部の末尾に記録される。*八角の黒印付 また、同書面に「此外神家絶廢之社四社」として「同州津久井縣佐野川村石橋尾神社神主軍多利日向介跡」とある。 『白川家門人帳』p.189-190
1865	元治2 3月15日	川勾神社の二見神太郎のもとに相州の白川伯家門下が集合し、岩村源馬の振る舞いについて取り扱いの困難を申し立て、集合門下の退役を白川伯家江戸役所に訴える。 *『川勾神社日記』日向介記事の下限 『川勾神社日記(二)』pp.342-343
	明治6	七沢村八幡神社旧神官中村民司(京次郎)、岩村源馬に神典を学んだ旨を記す。 『厚木市史』近世資料編(1)社寺No.299

表2 軍多利日向介（岩村触頭、岩村源馬・岩村弦馬）の名のある許状等  
（主に地方史史料集に採録されたもの）

1839	天保10	8月	〔身淨目式附族状〕 白川伯王殿 岩村触頭→陶山彦右衛門 『平塚市史』4資料編近世3 No.143 p.398 1984 平塚市真田
		9月	徳延村惣鎮守雷電社旧記回答 産子総代・組頭・名主・別当→神祇官様 軍多利日向介 『平塚市史』4資料編近世3 No.179 pp.446-447 1984 平塚市徳延 〔身淨目式附族状〕 白川神祇伯王殿岩村触頭⑧→三箸儀左衛門 『厚木市史』近世資料編(1)社寺 No.183 p.340 1986 厚木市七沢
		10月	神拜淨目式授与に対する礼状 神主三箸儀左衛門→神祇官様 御触頭 軍多利日向介 『厚木市史』近世資料編(1)社寺 No.183 p.340 1986 厚木市七沢
1840	天保11	正月	岩村触頭の『印鑑』 白川神祇伯王殿岩村触頭⑧→温水村奥田安房 『厚木市史』近世資料編(1)社寺 No.183 p.340 1986 厚木市温水
		4月	寒川神社浜降祭御旅所より礼状 茅ヶ崎村字南湖名主・親類、御旅所神主鈴木孫七 →神祇官様 御触頭 軍多利日向介 『茅ヶ崎市史』1資料編古代・中世・近世(上) No.170 p.611 1977 『寒川町史』9別編神社 No.205 p.525 1994 茅ヶ崎市南湖
		10月	神拜淨目式授与に対する礼状 柏木清六連印→神祇官様御触頭 軍多利日向介 二宮町 『二宮町史』別編寺社・金石文 No.133 p.244 1994 川勾神社
1847	弘化4	3月	奥田安房→白川様御役所 名主・百姓代・神主・推挙人岩村弦馬連印で白川役所に神主許状の交付を願い出たもの 『厚木市史』近世資料編(1)社寺 No.85 p.162 1986 厚木市温水



五所八幡宮文書

軍多利日向介が「神祇伯王殿官門学士石楯尾神社神主」を名乗って八角の刻印を押して「上仲村神社（五所八幡宮）」が源頼朝が祈願を寄せた六十一社のひとつであることを請け負ったもの。

・『川勾神社日記』<sup>③</sup>

『白川家門人帳』は軍多利日向介が「軍多利日向介」

を名乗る以前、入門時に名乗った

「岩権頭」の名乗

り、「軍多利日向介」を名乗るよう

になった時期、そ

して変名後の「岩

村源馬・岩村玄馬、

岩村弦馬」の名

乗りや軍多利日向介が推挙した門人

の一覧などがわか

る。また、『川勾

神社日記』は軍多

利日向介と同時期を日向介ともに白川伯家門人として活動した二見神太郎のものである。この神太郎の記述を通して軍多利日向介が急速に白川伯家の門人を拡大し、神太郎のもとにも親しく通いながら、次第に神太郎をはじめとする同じ相模国の主立った門人たちから批判され、排斥されるに至った経緯を読み取ることができる。また、軍多利日向介が軍多利神太夫・祇太夫、岩村源馬などとたびたび改名していた時期もここからわかる。

③ 佐野川とその周辺地域に残された古文書史料

・ 佐野川を含んだ旧藤野町、佐野川に隣接した旧城山町の町史所収

『藤野町史』・『城山町史』

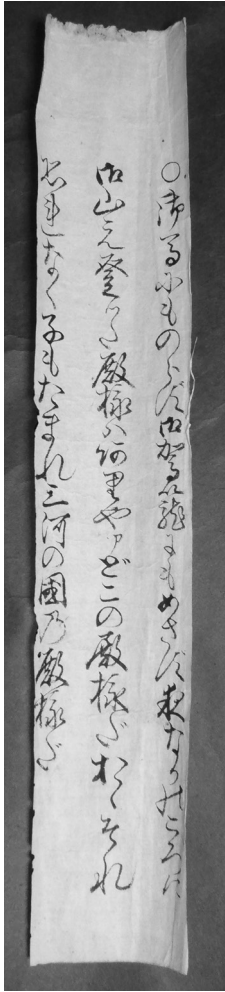
・ 『吉村毅家文書』神奈川県立公文書館寄託<sup>④</sup>

・ 『邊見和志家文書』<sup>⑤</sup>

吉村家、邊見家ともに佐野川の旧家。『邊見和志家文書』は佐野川で軍多利日向介の足跡を訪ねる中で発見した

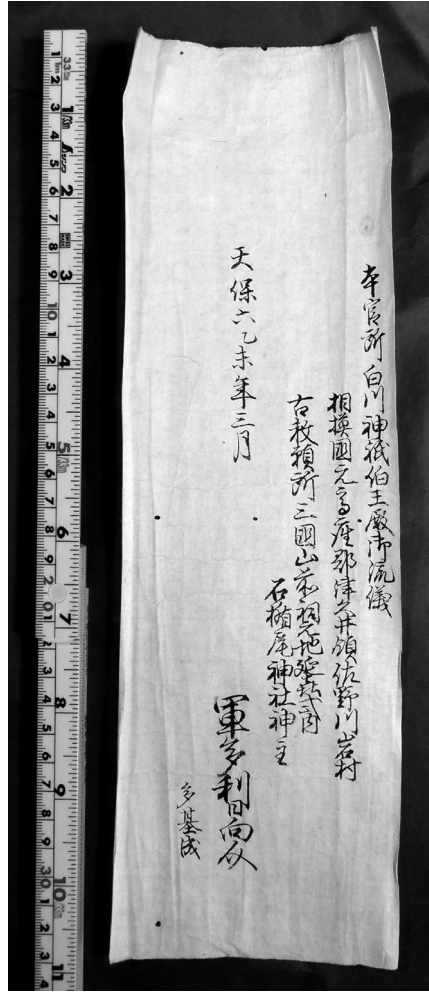
もの。所蔵者の邊見和志氏の御厚意で寄贈を受けた。

この中に切り分けられ、断簡化した軍多利日向介自筆と思われる異本が十片含まれている。『吉村毅家文書』



邊見和志家文書  
断簡 2 童謡部分

○御馬尔ものら須御駕籠尔もめさ須夜な可能ころに  
御山え登川多殿様ハ阿里ヤアどこの殿様多於、それ  
恐連なく子もたまれ三河の國乃殿様多



邊見和志家文書  
断簡 1 軍多利日向助多基成署名部分

にも『風土記稿』所載のものとの異本になる「古敷願所 三國山前祠元地石楯尾神社<sup>7)</sup>緑起」、「三國山石楯尾神社 由緒写」がある。また、軍多利日向介が天保十二年に 寺社奉行戸田日向守の白洲にかけられる際の村方から 提出された書類の草稿や写しが多数含まれる。

(二) 史料から見える軍多利日向介の活動とその後

以上の史料からわかった軍多利日向介の姿は以下の通りである。軍多利日向介は佐野川村の百姓源兵衛の子で、初名を熊次郎といった。兄の勇助は江戸に出て穀物の商いに関わり、商売のトラブルからか牢死している。<sup>15)</sup>天保九年、相手方から弟で神主になっていた軍多利日向介に宛てて詫状が出ている。軍多利日向介はそうした家庭の中の人であった。天保十二年十一月に日向介自身が白洲にすえられ、神主身分を剥奪されてもとの百姓身分に戻された。「軍多利日向介」の人生はここに終わったはずであった。

『吉村毅家文書』にみる訴訟関係の文書では軍多利日向介と熊次郎はよい書かれ方をしていない。百姓の子でありながら農事にむかず、「病身」で生活態度が悪く親類や村人から意見されても改めなかったため、親源兵衛も見放して文政二年に役

所に届け出て「帳外」とされた。以降、江戸府内に出て武家奉公、神職・陰陽師などをしながらくらし、妻子をともなつて文政九年に村に戻ってきたことになっている。ただ、佐野川で神主を務めるようになった経緯は複雑である。天保十二年の白洲に関して作成されたせいとか、一方で軍多利日向介を村の神主に迎え入れながら、一方でそもそも石楯尾神社の名乗りそのものが軍多利日向介が村に断りもなく勝手に名乗りだしたもののようであつたからである。<sup>16)</sup>

まず、軍多利日向介は百姓熊次郎から文政十年、白川伯家に入門し<sup>18)</sup>、岩権頭（村方では蚕山権頭）を名乗り、佐野川の蚕山神社の神主になった。そして翌文政十一年、岩権頭、親類勝右衛門、名主才兵衛連印で隣村武蔵国多摩郡檜原村川乗四組に働きかけて三國山山頂の内檜原村側の土地を譲り受けて「狭野皇宮」の社地とした。<sup>19)</sup>そして『邊見和志家文書』の断簡の署名によれば天保六年三月に「本官所白川神祇伯王殿御流儀相模國元高座郡津久井領佐野川岩村古敷願所三國山前祠元地延喜式内石楯尾神社神主軍多利日向介多基成」と署名した由緒・縁起を作成している。これは『白川家門人帳』に「軍多利日向介」に改名した旨を記録された四月に先立つものであることに注目したい。『白川家門人帳』には無神主であった石楯尾神社を村方と

相談の上引き受けたことになっているが、『吉村毅家文書』では軍多利日向介が村方が承知しないままに勝手に「軍多利日向介」も「石楯尾神社」も名乗ったことになっているからである。白川家では追認の形でも免許したのか、そして、現地の確認をしないままでも申請者の申請どおりに免許を与えていたのか。今回はそこまでは追跡できなかったが、この点が後の軍多利日向介をめぐる騒動にも関わるのである。<sup>20)</sup>

いずれにせよ、天保六年に石楯尾神社神主軍多利日向介はまがりなりに活動を始めた。地方史の資料編に採録された軍多利日向介の許状類を整理した表(表2)を見てみると、天保十年八月、現在の平塚市真田の陶山彦右衛門宛、同年九月の厚木市七沢の三箸儀左衛門宛の文書には「岩村触頭」となっていて、一方で同年九月の平塚市徳延の雷電社関係者から提出された文書には「神祇官様 軍多利日向介」、「神祇官様 御触頭 軍多利日向介」とある。翌天保十一年正月の厚木市温水の奥田安房宛、同年四月の茅ヶ崎市南湖の鈴木孫七から軍多利日向介宛、同年十月の二宮町川勾神社の柏木清六からの軍多利日向介宛の文書を見ると、このころ白川伯家側(あるいは軍多利日向介というべきか)から下級の者に宛てる文書には「岩村」を名乗り、下級の者から白川伯家側(その仲介者・推挙者たる軍

多利日向介)に宛てる場合は「御触頭 軍多利日向介」となっていたのか。呼名が一定でないところが注目される。軍多利日向介の名は不安定な扱いであったようだが、軍多利日向介はこのような相模国各地に白川伯家門人を拡大していったようである。

軍多利日向介の実力は現在の二宮町山西に鎮座する川勾神社の累代の神主二見神太郎の「触頭」任命の推挙人になっていることから当時白川伯家で認められていたことがわかる。<sup>21)</sup>このときははっきりと「軍多利日向介」を名乗っている。「川勾神社日記」にも天保十一年三月からしだいに「軍多利日向介」「軍多利」「日向介」の名で登場し、川勾神社に宿泊したり、立ち寄ったり、書状のやりとりをしたりしている。<sup>22)</sup>

しかし、軍多利日向介の積極的な門人勧誘活動は強引な手法もともなったらしく、白川伯家以前に大きな教線を形成していた吉田家の領分に踏み込んだことで寺社奉行の白洲にすえられることになった。<sup>23)</sup>天保十二年十一月二十六日、寺社奉行戸日向守の白洲で軍多利日向介は「上下剥取られ、元々之百姓二被致」れている。この間、『川勾神社日記』によれば軍多利日向介から軍多利神太夫、軍多利祇太夫などと改名していたことがわかる。<sup>24)</sup>

天保十二年、神主身分を剥奪されたはずの軍多利日向介はもとの百姓源兵衛悻熊次郎に戻ったはずであった。しかし、『川勾神社日記』や『白川家門人帳』をみると、「石楯尾神社神主」や「軍多利日向介」こそ名乗らなかつたものの、岩村源馬<sup>(25)</sup>と名を変えてあいかわらず白川伯家の門人、そして推挙人として活動を続け、元治元年までその活動があつたことがわかっている。しかも二見神太郎と同門との交流もあつた。彼が元治元年に白川伯家に提出した五二件の推挙門人の数が門人募集の活動が衰えていなかつたことを示している。しかし軍多利日向介改め岩村源馬の活動も、遂に終わるときが来たようだ。『川勾神社日記』によれば元治二年三月、触頭を勤める二見神太郎はじめ相模国の主立った白川伯家門人の神主が連名でかつて軍多利日向介だつた岩村源馬の排除を白川伯家にせまり、聞き入れなければ連名した者全員で退役すると主張するに至つた。<sup>(26)</sup>『白川家門人帳』も元治元年の記事で岩村源馬の記事が見られなくなり、文政十亥年八月五日の軍多利日向介の初入門の欄が線で抹消される「破門」となっている。この「破門」は天保十二年のときのものなのか。しかし、それ以降の推挙活動がはっきりとあつた以上、この「破門」は元治二年の訴えによるものとみるべきだろう。

### おわりに

論社がそれぞれに由緒を語ることをふまれば、佐野川の石楯尾神社に延喜式内社の社格を与えかけた軍多利日向介は天保十二年の白洲でその企図を挫折してしまつた。<sup>(28)</sup>しかし旺盛な彼の上昇意欲はその後岩村源馬と変名してからも勧誘を受けた者から触頭に訴えられるほどの白川家門人獲得活動の展開につながつていた。<sup>(29)</sup>それが同門の触頭や神主たちから排斥される流れに発展したのだが、彼が残した石楯尾神社の由緒・縁起や系譜、佐野川の軍多利社（軍荼利夜叉明王）や三國山の奥宮（狭野皇宮）、生藤山、神行麻留（カヤマル）、甘草水などのいわれが残つた。『吉村穀家文書』の一編を参照するなら、なかつたはずの石楯尾神社はその後も明治維新を経て村社石楯尾神社となり、現在も佐野川地区の村の鎮守として祭り守られている。また、神奈川県下では有名な寒川神社の祭礼に不可欠な茅ヶ崎市南湖における「御浜降祭」も、由緒に関する文書に軍多利日向介の名が残されている。<sup>(31)</sup>

どこまでが彼の作文か、それは本稿の及ばなかつたところであるが、『風土記稿』の編纂者も本文中に採用した由緒・縁起、

系譜、いわれを紹介するたびに「あやしいけれども、ほかにここまで詳しいものがないから載せることとする」という掲載のしかたをしている。前掲の小川もそうした疑わしさにふれてゐるし、『藤野町史』も『風土記稿』の地誌探索担当であつた塩野所左衛門適斎・八木甚右衛門忠讓の文書をひいて、彼らが日向介の言説について再調査に踏み込んでゐる姿を紹介してゐる<sup>(32)</sup>。かくまで怪しい由緒・縁起、系譜、いわれであるが、もし作文であつたとすれば、『記紀』から六国史、『吾妻鏡』から『太平記』などにわたる古典から情報を集めたかも知れない。そしてそれまでに佐野川とその近隣に散在し、成立していたであろう軍荼利明王などの修験の痕跡や護良親王と雛鶴姫などの落人伝説などをふまえ、あるいは幕府にうったえかける力を秘めた徳川家康伝説を創出するなどしたのかも知れない。その並外れた(荒唐無稽な)縁起の構想力に驚かされる。しかも浄禅寺住持石船の碑文や浄禅寺の石村石楯位牌、足利義満位牌<sup>(33)</sup>などの援用、七奇石の配置<sup>(34)</sup>、そして縁起や棟札写しに見られる「古記録は確かにあつたが原本を失ひ、幸い写しを取つてゐるから<sup>(35)</sup>」という断り書きの挿入など、よく準備されたしかけにも驚かされる。こうした力はどこから生み出され、育まれたのか。あるいは白川伯家に軍多利日向介のような表現力を育てる養成課程が

あつたのか。それは今後の課題としたい。

以上、由緒・縁起などによって地域に現在に至るまで影響を残した軍多利日向介であるが、岩村源馬と変名した彼は故郷の佐野川を離れ、同門の二見神太郎と連絡しながら現在の小田原市曾我谷津に住んで活動してゐることが『川勾神社日記』からわかる<sup>(36)</sup>。しかも弘化四年の記事に依れば、軍多利日向介改め岩村源馬は曾我谷津小沢明神社神主熊勝のもとに隠宅を構えてくらしつてゐた。二見神太郎は熊勝から昼食の提供を受けてから「出府」して留守の源馬にあてた用向きを言付けてゐる。「熊勝」とは軍多利日向介が『風土記稿』に掲載された系譜の末尾に、古風な名をつけて四人の子をあげた、その次男の名ではなかつたか。『白川家門人帳』には熊勝の名を見ないが、ところどころ「岩村都磨」、「軍多利淡路<sup>(37)</sup>」など、軍多利日向介(岩村源馬)に関係がありそうな神職名がある。

それらの追跡は本稿には間に合わなかつたが、今後も史料を求めてみたい。今回、軍多利日向介を探索するにあたり、日向介の故郷佐野川の旧家邊見和志氏のもとから史料の提供を受けた。和志氏の厳父、故・邊見元氏は熱心に郷土史に取り組まれ、そのノートと思われる資料もふくめて今後の研究のためにと寄贈をいただいた。鉛筆書きのノートの中に次のメモがあつた。

旧 邊見亢氏所藏 鉛筆書きノート(部分)

※ 「・・・」 挿入部分

特ニ参考書類ハ「累代」（律市石楯尾神社ノ神官）「軍多利日向介」多ノ基成ノ「末孫」末流足柄下郡下曾我明神故神官尾崎八束氏祖佐ノ川村石楯尾神官タリシ當時ヲ確証スル所藏ノモノナリ

邊見氏もあるいは「熊勝」の名で小沢明神社（現、宗我神社）の神主を務めた人物に関心を向けたのかも知れない。小沢明神社は代々「尾崎」氏が神主を務め、小説家の尾崎一雄はその孫であった<sup>(8)</sup>。ノートにある尾崎八束は尾崎一雄の父であり、若くして亡くなったが皇學館大學で教鞭を執った人でもあった。尾崎氏は吉田家の門流であるが、白川伯家のもとで地位を築いた軍多利日向介改め岩村源馬と、この小沢明神社の神主熊勝の關係は、今後明らかにできる史料と出会うことを期待したい。

稿を終えるにあたり、貴重な史料の提供をいただいた五所八幡宮宮司中村昭彦様、佐野川の邊見和志様に改めて心より御礼申し上げます。邊見和志様は御父様より受け継いだ佐野川と石楯尾神社に関わる貴重な史料を今後の学問のためにと御寄贈いただきました。御芳志にお応えできる活用ができるよう努力します。

ます。

注

- (1) 『新編相模国風土記稿』基本的に雄山閣版 大日本地誌大系<sup>23</sup>第五卷 一九九八年 を用いる。
- (2) 佐藤誠夫「神社縁起に見る佐野川」『ふじの町史研究誌』第1号 藤野町史編さん専門委員会 一九九〇年所収
- (3) 小川良一「佐野川・名倉石楯尾神社論争考」『城山風土記』第四号—歴史・民俗編— 城山町史編さん委員会 一九九六年所収  
論社については式内社研究会 編『式内社調査研究』第11巻 東海道路6— 皇學館大學出版部 pp.36,38
- (4) 『式内社調査研究』は「所在」・「論社考證」において石楯尾神社の論社を7社あげている。相模原市緑区佐野川・名倉・大島、南区磯部、大和市下鶴間、座間市座間入谷、藤沢市鶴沼神明  
一九七六年 pp.83,89
- (5) 右掲 注3 小川論文
- (6) 近世期の佐野川村のデータ『藤野町史』資料編上 pp.171,172 pp.179-207 pp.207,216 佐藤才兵衛家の横浜出版『藤野町史』資料編上 pp.604,606
- (7) 近世期の佐野川の地域呼称『藤野町史』通史編 p.272
- (8) 倉子峠の松尾芭蕉・各務支考句碑『藤野町史』資料編上 pp.604,606
- (9) 『邊見和志家文書』軍多利日向介自筆出緒・縁起の断簡
- (10) 貫達人 編『改訂新編相州古文書』第五巻 角川書店 一九七〇年 pp.166-169

- (11) 近藤喜博 編『白川家門人帳』白川家門人帳刊行会 清文堂出版株式会社 一九七二年
- (12) 軍多利日向介の『仮書』天保九(一八三八)年戊戌 神奈川県足柄上郡中井町遠藤 五所八幡宮所蔵 タテ三二cm×ヨコ四五cm
- (13) 『川勾神社日記』(一)二宮町史資料叢書4 二宮町 一九九三年 川勾神社は二宮町に鎮座し、相模国二宮、延喜式内社
- (14) 『吉村穀家文書』神奈川県立公文書館 寄託 資料群I D九二〇〇四三〇〇七二
- (15) 『邊見和志家文書』嚴父、故、邊見元氏は旧藤野町文化財保護委員
- (16) 『吉村穀家文書』資料群I D二二〇〇四四五四一三
- (17) 『吉村穀家文書』資料群I D二二〇〇四四五四一七  
 ついでには佐野川村で進退していたが管理ができていなかった「三国山本宮狭野皇社同所南方軍茶利社」を軍多利日向介にまかせ、しかも日向介の名は「蚕山赤沼権頭」として人別帳に載せていた。ところが天保六年に村に断りもなく白川伯家に願って「石楯尾神社神主軍茶利日向介与申名御免しヲ請」けたと述べている。
- (18) 『白川家門人帳』p.176
- (19) 前掲、小川論文に引用(小川論文は 小泉輝三朗「楡原・ふるさとの覚書」武蔵野郷土史刊行会 一九八〇年 pp.78-79)の誤読と思われる部分を直したうえ引用
- (20) 『平塚市史』などの文書によれば、白川伯家から何らかの許状を受ける場合は白川伯家関係者からの推挙と、ところの領主(その担当者)の「添状」(添翰)を必要とした。  
 史料No.143-145『平塚市史』資料編4 近世3 pp.398-399 一九八四年
- (21) 『二宮町史』別編 寺社金石文 史料No.131 pp.241-243
- (22) 『川勾神社日記』(1) p.164
- (23) ほかに前掲注20『平塚市史』の陶山豊後関係の文書には同じ天保十二年の八月に陶山豊後をめぐる争論で領主の小林十郎左衛門がいきさつを上申する文書がある。そこで小林は「一昨亥年白川神祇道触頭軍多利日向介与申者知行所江罷越・・・」と書き始めて陶山豊後が開村した軍多利日向介によって白川伯家の門人に取立てられたいきさつを詳しく述べている。そこで注目されるのは日向介が「旧記にある」ことを根拠に中絶していた旧神主の係累を訪ねだし、百姓彦右衛門を神職「陶山豊後」にした、という下りである。中絶していた神社の再興というストーリーを持ち出して神職のいなかったいなかの神社に地元百姓から白川伯家門人の神主を立ち上げている。おそらくこれは軍多利日向介自身の立身の経緯と重なり合うものである。
- (24) 史料No.146『平塚市史』資料編4 近世3 pp.399-403 一九八四年
- (25) 『川勾神社日記』(1) pp.191-193
- (26) 『川勾神社日記』pp.342-343
- (27) 『白川家門人帳』p.189 ついでには軍多利日向介改め岩村源馬が元治元年の禁門の変の京都大火で白川伯家を見舞う書翰の内容と、「岡田刑部・矢嶋雅樂」の二名が廻村先で「風聞不宜候」などと非難し、「御本殿之御称号汚可申」とまで表現している追伸まで収録されている。
- (28) 『吉村穀家文書』資料群I D二二〇〇四四五四三、三三には明治二年、軍多利日向介が姿を消して久しい佐野川村が管轄の三山原に宛て、佐野川の石楯尾神社を「式内之社」と位置づけている。
- (29) 『川勾神社日記』p.234、p.269
- (30) 『吉村穀家文書』資料群I D二二〇〇四四五四一、六一、五五二四には石楯尾神社が淨禪寺を別当として存在していた書き方。二二〇〇四四五四一五では大通寺を社務と表現している。

- (31) 史料No.170-171 『茅ヶ崎市史』 1 資料編 古代・中世・近世 (上)  
pp.611-612
- (32) 『藤野町史』 通史編 pp.439-446
- (33) 『藤野町史』 通史編 pp.190-192
- (34) 藤野町文化財保護委員会『藤野町の神社と寺院』藤野町教育委員会  
一九九二年 pp.28-30
- (35) 石楯尾神社と同じ相模国の十三座の延喜式内社である寒川神社が鎮座する寒川町の町史編纂において、寒川町文書館のマイクロフィルムに取められた菊地基泰家文書中にそのフリースが登場する。『延喜式内十三社相模國鎮守神』と題された木板刷りの神号一覽である。この一覽の枠外に「天文之古板破滅ニ付天保二年再板 石楯尾神社神主軍多利日向介基成」と刷られているのである。
- (36) 『川勾神社日記』 p.225、pp.237-238、p.269、p.340、p.342 『川勾神社日記』 p.225
- (37) 岩村都磨 軍多利淡路『白川家門人帳』 pp.178-179 両者とも上古沢村五頭稻荷社の社務と祠官。軍多利淡路は「太基延」の名乗りを添えている。「太」は「多」に通じ、「基延」の「基」は、「基續」、「基信」、「基治」、「基成」と、軍多利日向介之代々の通字にあらわれる字である。神奈川県図書館会郷土資料編集委員会 編『神奈川縣皇國地誌殘稿』下巻 神奈川県立図書館 一九五九年 pp.61-64
- (38) 『皇國地誌殘稿』によれば、皇國地誌編纂当時の神主は尾崎基廣。尾崎一雄の系譜までは調べが及ばなかったが、あるいは熊勝はこの基廣にあたるか。
- 尾崎一雄『わたしの履歴書 文化人5』所収 一九八三年 日本經濟新聞社
- 尾崎一雄『父祖の地』尾崎一雄全集 第1巻所収 一九八二年 筑摩書房